

見てはならない神々の表現と受容

——日本の神々はどのように表されてきたか——

山 本 陽 子

On The Expressions and the Worships of Japanese Invisible Gods

Yoko YAMAMOTO

本論は「見てはならない神々の表現と受容—日本の神々はどのように表されてきたか—」と題する、日本の神々の表し方と隠し方についてであるが、その前提として、本地仏像や垂迹神像の成立までを、まず概観しておきたい。

1. 日本における神像の成立まで

眼に見えない・見てはいけない神々

古代インドやユダヤ教の神々などと同様に、古代日本の神々も姿・形を持たないもの、眼に見えないものとされていたと考えられる。神々はひとに姿を見せず、人は神の「ます」場所や、神の「こ籠もる」岩などを礼拝対象としていた。

たとえば日本で最も古い神社の一つである三輪山を祀る大神神社では、拝殿の奥の御簾の向こうには何もなくて山そのものを拝むようになっている。熊野的那智大社では那智の滝が、同じく神倉神社ではゴトビキ岩が、神が坐す、あるいは籠もるものとして礼拝されてきた。

たとえ神々が人前に姿を現したとしても、人々はそれを見てはならなかった。『常陸国風土記』行方郡の夜刀の神のエピソードには、俗の言として「ひきあ わざわひ まぬが いへかど ほろぼ 卒引て難を免るる時、見る人あらば、家門を破滅し、うみのこつ 子孫継がず」、この神が出て来たときは一斉に逃げるが、その時振り返って神を見た人がいたら、その家は滅び、子孫は絶えてしまう、とある。

また『日本書紀』にある箸墓伝説では、三輪山のおおものぬし やまと と と び も も そ ひめのみこと 大物主神が倭迹迹日百襲姫命のもとに通うが、昼は姿を見せずに夜のみ来る。姫が姿を見たいと願ったところ神の正体は蛇だったので、姫が思わず悲鳴

を上げると神は去ってしまい、後悔した姫は箸で陰を撞いて死んだとされる。

神は人に姿を見せず、たとえ姿を現したとしても、人はそれを見てはならない。もし見てしまえば神はその人から去ってしまうか、神を見た人は死んでしまうと考えられていたのである。このことは鶴女房や雪女の伝説からも、推測できよう。神を見ることに対するこのような禁忌の下で、古代日本では神の姿を造形するような宗教美術は発達しなかったと考えられる。

仏教伝来と僧形神像

ところが人の姿をした仏像を持つ仏教の伝来で、その様相は変化する。『日本書紀』の欽明天皇の、「にしのとりのくに たてまつ ほけ か ほきらぎら もは いま かつ 西蕃の献れる仏の相貌端厳し。全ら未だ曾て有ず。」という言葉からは、神の姿を見たことがない天皇が、明確な人の姿をした礼拝対象の仏像を見たことへの驚愕が伝わってくる。

その後半世紀にわたる崇仏論争を経て仏教は受け入れられ、十七條の憲法に「篤く三宝を敬へ。三宝とは仏・法・僧なり」とうたわれ、多くの寺院が建立され、仏像が一多くの人々の目にさらされる大仏までもが一造られるようになる。

すると日本の神々を祀る側も、このままではいられなくなってくる。眼に見える仏に対して、眼に見えない神、どちらの視覚的インパクトが高いかは明白である。そこで日本の神々も眼に見える人の姿に表したいという要求が生じる。しかし仮に現れたとしても、その姿を見た者は死んでしまうとされるような神である、そのまま造形化するわけにはゆかな

い。そこで神託として、神自身が仏法に帰依したいと言ったということにしたのである。

例えば『多度神宮寺伽藍縁起并資材帳』では、多度神が「吾久しく劫を経、重き罪業をなし神道の報いを受く。今冀へに永く神身を離れ、三宝に帰依せんと欲す。」と託宣したとある。神が俗身を離れ仏教に帰依したいと願うので、「小堂と神の御像を造立し、号して多度大菩薩と称す」と書かれている。このようなものが日本の神々の造形化の始まりと考えられる。その姿がどのようなものであったかについては、多度大菩薩が菩薩と呼ばれていることから、仏道を修行中の立場の、例えば僧侶像のような形状ではなかったかと想像されている。

これは多度神のみのことではない。恐らく当時多くの神社において起こったことと考えられ、例えば八幡大菩薩の称号を持つ八幡神でも、頭を丸めて袈裟を着た、僧形八幡と呼ばれる僧形神像が、各地の八幡社で造られている。八幡社に限らず、僧形神像はさらに他の神社でも造立されたと考えられている。例えば奥山寺三宝荒神社旧蔵とされる僧形神像は、坊主頭で一見すると地藏菩薩に見えるが、手は笏を捧げる形をしているので、神の像として造られたと想定されるのである。

本地仏像と垂迹神像

一方、平安初期には本地垂迹思想に基づき、日本の神々とは、本来は仏教の仏たち即ち本地仏^{ほんちぶつ}であるものが、日本の衆生のために仮に日本人の姿をとって日本に現れた状態、すなわち垂迹神^{すいじやくしん}であるという考えの下で、神を本地仏の姿、すなわち仏像として表すことも行われるようになった。日本人の神の像を造るのは畏れ多いけれども、その本来の姿の仏としてならば、日本でははじめから仏像は人の目に見えるものとして入ってきているので比較的、抵抗なく造られたのであろう。

例えば白山の神として造られた猿田彦神社所蔵の像は、どこから見ても仏教の十一面観音の姿だが、神体として祀られていたものである。また、醍醐寺の清瀧権現社の神体となっていた像も、どこから見ても仏教の如意輪観音と異ならない。このような本地垂迹信仰の下で、白山の本地仏は十一面観音、八幡なら本地仏は阿弥陀というように、それぞれの神社の神はそれぞれ特定の種類の仏菩薩として表されるようになった。

(本地仏) (垂迹神像) (僧形神像)



(図1) 多様な姿に造形された八幡神

一方、本地垂迹思想の下ではこれに続き、せつかくインドの仏が我々のために神となって日本人の姿で現れたのであれば、その垂迹形である日本人の姿の神を表現してもよいのではないか、という考えも起こってきた。

例えば松尾大社には、冠をかぶり貴族の装束を着た老年の男性として表された神像が伝わる。また春日大社では、鹿島から白鹿に乗って奈良にやって来たと言われる春日一宮の姿が、束帯を着た老人の姿で表される。さらに白山の主神は団扇を持った若い女性に、春日一宮であれば束帯姿で笏を持つ老人の姿、というようにそれぞれの神の垂迹形を特定するべく、その特徴は細部にわたって固定化されてゆく。

こうして形を持たなかったはずの日本の神々は、中世には様々な姿で表されるようになった。八幡神を例にとっても、僧形八幡神像・本地仏の阿弥陀如来像・その垂迹神としての束帯男性像と同じ神でも多様な姿(図1)に表されるようになったのである。そしてこのような神像は現在、美術館や博物館の特別展では、はばかりことなく展示されている。当初の、神の姿を見ると罰が当たるなどという禁忌は、すっかり消えてしまったかのように見える。

2. 神像の安置状態と神像を見た者

神像の祀られ方

しかし、話はここから始まる。実際の神社においてはどうか。せつかく日本人の姿にまで造形されるようになった神像も、神社の奥の院の扉の内に納められ、扉が開かれることはまず無かったのである。現在、展覧会や神社の宝物館では問題なく出品され展示されている神々の像でも、再び神社に戻され礼拝の対象となるときは、社殿の奥や御簾の内に、礼拝する人々から姿が見えないように祀られるのである。これは、多くの寺院で仏像が人の目に見えるように祀られていること—例えば平等院の阿

弥陀如来像が、堂の扉を閉めてもせめて顔だけでも見えるようにと扉の格子部分が丸くくりぬかれているといった仏像の祀られ方―とは、対照的である。

人目に付かないように祀られていたのは、垂迹神像だけではない。神の本来の姿とされる本地仏としての像、例えば先の清瀧権現の本地仏として造られた如意輪観音像も、昭和14年の山火事で堂舎に火が迫るまでは、白木の箱に秘蔵されていたという。どこから見ても仏像のように見えても、本地仏の神像である以上は、姿が見えないように配慮して祀られていたのである。

このように、神の像を祀りながらもその姿を人目に触れさせないこと自体も、日本古来の神々に関する文化の一側面と言い得るであろう。

神像を見ることについて

神の像を祀りながらも、あえて見ることを忌んだり、見ないように配慮をしたりした記述は、中世にもある。例えば、石清水八幡宮のご神体について『八幡愚童訓』「神躰事」は「右垂迹の実躰におきては、神道幽玄にして、凡夫不浄の眼にて奉見事なければ、伝書に不及。」と、凡夫不浄の眼で見えてはならないとあり、『続古事談』では石清水八幡宮の御体として出現した阿弥陀三尊の姿を行教がうつした本尊（鏡に本地仏を表した懸仏らしいが）を、「いそぎ御殿をつくり、内殿のうちに此御体をかけたてまつる。人あへて見事なし。たゞ、御殿のあづかり、御座をしく時、うしろむきてしく。」と内殿に祀られ、人はあえて見ず、社殿に仕える者さえ御座を敷く時は後ろを向いて敷くと、神体を見ぬように配慮する様子が具体的に述べられている。

この禁忌は、危急の場合でさえ守らなければならなかったようだ。保延六年の石清水八幡の社殿炎上の時、火の中から神体のうち御璽の箱を持ち出そうとした御殿司覚豪は「あまりに仰天して御璽の箱をすべらかし奉て、蓋すこしあきたりけるにや、光明かゞやき給へりと計見まいらせて、両眼忽にくらくなり、前後を弁ずなりければ、暫心地をしづめ衣の袖をうちおほひ奉て」と、たまたま見えかけると眼がくらくなったので、心を静めて袖で覆って持ち出したという。『八幡愚童訓』の筆者はこれを例に挙げ、「加様の次にはずれざまに拝見不叶、まして実躰をいかでか是を奉見らん。」このような非常時に蓋が外れてさえも見てはならないのだから、どうし

てその実体を見ることができようか、と解説する。

神を見た者

そのような、見てはならない神像を見てしまった者はどうなるのか。『古事談』には、石清水八幡宮外殿の八幡大菩薩僧形像を「不審に堪えず、御供を供える次に」見てしまった権俗別当紀兼貞の話がある。その姿を「首に日輪を戴き、御手に翳を持たしめ給ふ」と語るのだが、兼貞は「此の事の故に不運にして止む」と、神の姿を見てしまった故に運に見放されたとされる。神を見たゆえに神罰を被った記事は『八幡愚童訓』にもあり、執行法橋俊成は「御体を伺参らせて目くらく成にけり」と、八幡神の姿を見て目がつぶれてしまったという。

これは石清水八幡に限ったことではない。例えば元禄6年刊『本朝画史』宅間澄賀の項にも、梅尾の高山寺に伝わる春日住吉二神ノ像にまつわる話がある。これを見たいと絵師の澄賀が願ったところ、明恵は「凡眼之ヲ拝スルトキハ、則チ恐ラクハ害有ラント」断る。しかし澄賀があまりに見たいと頼むので、とうとう許してしまうと、澄賀はこれを見て竊に模写し、京に逃げ戻る途上で落馬して死んでしまった、上人が恐れた通りになったのだ、とある。

神を見ない配慮

このような神像を見てはならない見せてはならないという感覚は、現在も実際の信仰の場には残存しているのではないだろうか。例えば特別展の『大古事記展』の会場では問題なく展示されていた春日大社神宝の鹿島立神影図は、春日大社の儀式で懸けられる場合は、神の顔の位置に大きな幣がかぶさるようにして神の顔が見えないようになっている（NHKの番組放映に拠る）。2015年の春日大社式年造替特別企画「御神宝特別拝観」のパンフレット写真も、その公開の場でも、やはり幣がかぶさるようになって神の顔が見えないように配慮されている。

これは神社側の意識だけではない。我々が神社に参拝するときには、社殿の奥に神像があるか否かも、それを見ようとする事もなく「なにごとのおはしますかは知らねども」、拝む。これは礼拝対象の仏像やキリストやマリア像が見えるように祀られている仏教寺院やキリスト教の教会と比較すると、その特異さが際立つ。

同じことは個々の家の神棚についても言える。仏

壇ならば扉を開いて中の仏像を拝むのが普通であろう。けれども神棚を拝んでも、その小さな社やしらの中に何が祀られているのか、扉を開いて見ることはない。

より身近なものに御守がある。あの錦の袋の中を開けて中味を見る人はまずいない。見たら目がつぶれる、罰が当たる、そこまでいなくても御守の御利益がなくなってしまいそうな気がするのだ。日本古来の、神の姿を見てはいけないという禁忌は、神像が作られるようになった中世でも、それらの神像が博物館に展示されている現代でも、いまだ失われてはいないのである。

見て拝むための神の造形

神像を見てはならないとされる一方、神を眼に見える形で拝みたいという願望も存在する。そこで、人以外の形で神を造形することも行われた。その一例である神号が文字で書かれた三社託宣などの掛軸は、床の間や祭礼の御神酒所で日常的に目にする。遡れば古く、神を人の姿で描く技量と資金を持ちながらも、春日社の風景の中に人の姿の神々でなく、あえて文字で表した中世の作例が伝来する。

あるいは神の乗物や神使となる動物を表すという方法も行われた。春日であれば鹿、春日鹿曼荼羅図は春日の神々が鹿に乗って鹿島から奈良へやってきたという伝説に基づく。現存最古と思われる陽明文庫所蔵の鹿曼荼羅図では、その鹿を春日の風景の中に描きながらも、背の鞍上には人の姿の神ではなく神の乗り移った櫛を立て、その微かなそよぎによって神の存在を暗示する。春日だけではない、日吉大社ならば猿が、稲荷ならば狐が、熊野ではカラスが神の使いとして表されている。

神を人の姿でなく表現するいまひとつの手段として考案されたのが、神社の景色をそのまま描いた宮曼荼羅である。例えば奈良の春日大社の場合、12世紀末の藤原兼実の日記『玉葉』には、「図絵の御社」を懸けて拝んだという記録がある。朝早くから身を清めた後、束帯を着け、幣帛を取り、図絵の御社の前で常の如く拝礼をし、その後、束帯を着ながら、神前で般若心経一千巻を読み奉ったのである。兼実の藤原氏の氏神は春日大社で奈良であるが、現地に行けない時は、図絵の御社、一現存最古とされる根津美術館所蔵の春日宮曼荼羅のようなものか一を懸けて、その前で参詣したときの如く身を清めて正装し、礼拝の儀式を行っている。

(図2) 東京国立博物館蔵 春日宮曼荼羅図



このような春日宮曼荼羅はその後、爆発的に流行したと見え、1325年の『花園天皇宸記』には、春日曼荼羅という社頭の気色を図画したものを曼荼羅と呼んで、近年人ごとに所持して、実際の神社での儀式のように供物などさまざまなことを行っているという記事がある。

春日宮曼荼羅には本地仏やその梵字を描き込んだ作例もあるが、東京国立博物館本(図2)のように景色以外は何も描かれていない、まるで風景画のような礼拝図も存在する。春日の4社並んだ社殿やその周囲の建物群が位置も正確に描かれ、その背後に神体山の御笠山と春日奥山、左に若草山がそれぞれ正確に配され、あたかも現地へ行ったかのようにヴァーチャルな参拝が可能となる。

このように、姿を持たない日本の神々に対しては、僧形や仏像・垂迹形の人物像として造形しながらもそれを見ない・見せないための配慮をして祀る一方、中世には人の姿ではなく文字や神のお使い動物や神社の景色としての神の表現も行われていたのである。

3. 縁起絵巻における神の表現

「春日権現験記絵」の神

それでもどのように表せばよいか難しいのが、神社の縁起絵巻の場合である。神社の絵巻ではその祭神を主人公として、由来や主人公の起こす靈験を詳しく絵画化するので、主人公を文字やお使い動物で代用することもできず、神の坐す神社の景色ばかりを繰り返し描いて済ますわけにもゆかない。かといって神を人の姿で表してしまえば、社殿の奥に人から見えぬように祀られる神像や本地仏とは違っ

て、順次繰り広げつつ鑑賞される絵巻では、拵げられた画中の神々の上に御簾を懸けたり幣を載せたりして隠すことはできない。

そこで、絵巻の中で神を人の姿で描くためには、新たな手段が必要となる。例に挙げる「春日権現験記絵」は、藤原氏の氏神である春日の神々の縁起と霊験に絵を付けた20巻の絵巻で、詞書には神々が様々な状況の下、人の姿で登場する。この絵巻制作にあたって絵師の高階隆兼は、神の姿は描いてもさりげなく顔は見せない配慮を行っている。(図3)

例えば手前の木の枝をほんの少し延ばして神々の顔に重なるようにして、顔を隠す。また社殿から出現した神の姿は束帯を着た首もとまでは描かれるが、顔は社殿の軒に隠れて見えない。この箇所は詞書に、神は「御けしきあらゝかに、御まなじりいとはげしくて、うちそむき給へり」荒々しく目尻をつり上げて睨み、ふいと横を向いてしまったと具体的に表情が記されている場面にもかかわらず、その顔はあえて描かれない。高い視点から描くことにより、軒が被さって神の顔が見えないのである。

この絵巻で神の顔が見えないのが偶然でないことは、屋内の僧侶が庭に現れた神と対面する箇所を、似た状況の「法然上人絵伝」の法然の前に善導が現れた場面と比較する(図4)と判りやすい。仏教の「法然上人絵伝」で出現した善導の顔が明らかに見えている場面と並べれば、せつかく出現した神の顔が木の枝に隠れて見えない不自然さが際立つ。

神の顔を描かない手段は、枝や軒で隠すのみに限らない。後ろ姿にして顔を見せない、という方法もある。眠る僧侶の前に現れた春日女神の後ろ姿も自然に見えるが、よく似た設定の「石山寺縁起絵巻」において眠る菅原孝標の娘の夢で、観音菩薩がこちらを向いて顔もあらわに出現する場面と比較(図5)すると、春日女神が後ろ姿に描かれていることが、顔を隠す意図に基づく作為であったことが判る。

春日社には一宮から四宮までと、若宮の神々が祀られているので、その垂迹神の姿も、束帯の男神から桂姿の女神、童子の姿と多様であるが、そのいずれの垂迹神も一掛軸では顔が描かれていた男神ですらも一絵巻の中では顔を見せることはない。

「春日権現験記絵」で神の顔が描かれる場合

ただし、例外が2つある。その一は、三宮の神が本地仏として現れる2場面である。三宮の垂迹神は

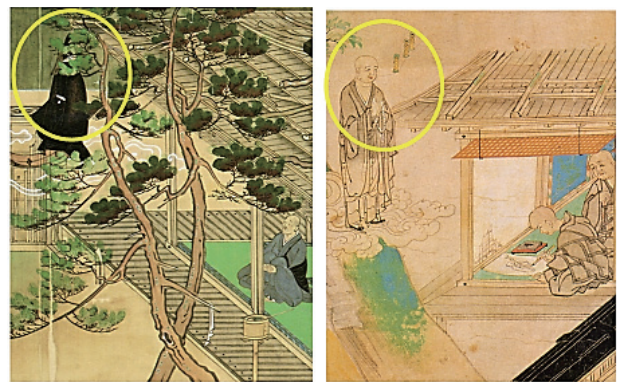
(図3)「春日権現験記絵」の神の顔を隠す表現



枝で顔を隠す

軒で顔を隠す

(図4) 顔が見えない神社縁起絵巻と顔が見える仏教系絵巻



春日権現験記絵

法然上人絵伝 (増上寺本)

(図5) 顔が見えない神社縁起絵巻と顔が見える仏教系絵巻

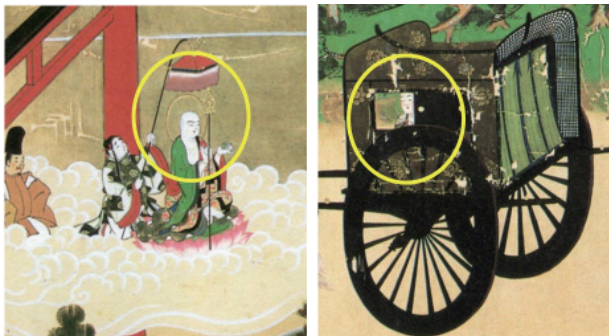


春日権現験記絵

石山寺縁起絵巻

僧形で、本地仏も僧形の地藏菩薩なので区別し難いが、垂迹神の顔は肌色である一方、地藏は白塗りで眉間に点のような白毫があることで判別できる。2場面の僧形(図6)をよく見ると、いずれも顔は白塗りで白毫があるので本地仏の地藏を描いたものとわかる。本地仏の場合は、絵巻の中に仏教の仏が描かれる場合と同様に、ことさら顔を隠さずに描かれるのである。

(図6)「春日権現験記絵」で顔を見せる神



三宮の神が本地仏の地藏の姿で現れる場合

(図7)「春日権現験記絵」で顔を見せる女神



人から祀られる以前の場面のみ顔を見せる

もう一つの例外は、まだ人から神として祀られる以前の2場面(図7)である。「春日権現験記絵」冒頭の巻において、藤原氏の前に出現しこの地が霊地であることを告げる女神は、顔をあらわに見せ、これに続く場面で竹林の上に現れ春日大明神と名乗る女神も、顔を明らかに見せている。しかし、社が建てられた以降の場面では、同じ女神も男神も顔は見せない。

そこでの絵巻の神について、祀られる以前は顔を描くが、祀られた後は顔を描かないという仮説が立つ。本地仏として出現した場合を除き、「春日権現験記絵」で女神の顔が見える2場面とも、神が祀られる以前である。一方、神が人から祀られるようになった後の23箇所全てで、本地仏でなく人の姿で現れた神々の顔が隠されている。

もっとも、「春日権現験記絵」の中で神が人から祀られる前の場面は非常に短く、神が顔を見せるのは20巻のうち巻1の第2段と3段の2場面に過ぎない。そこで人から祀られる前の神の顔が描かれたのが偶然か否かを、他の作例によって確認したい。

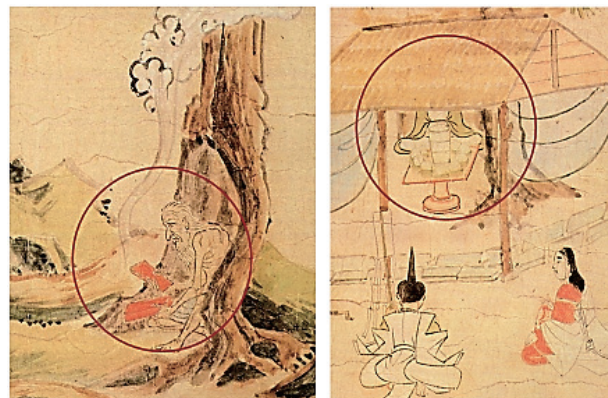
「浦嶋明神縁起絵巻」で神の顔が隠される場合

神として祀られるより前の部分長い縁起絵巻としては「浦嶋明神縁起絵巻」を取り上げたい。絵巻の主人公で最後に神となるのは浦の嶋子、あの浦島太郎である。この絵巻では浦嶋が漁で亀を釣り上げたことになっていて、浦嶋の顔は船に乗るときも亀を釣ったところも、明らかに描かれている。浦嶋がつり上げた亀は船の中で竜宮の姫君となって、浦嶋子を竜宮へ誘う。竜宮の門前の浦嶋子も、顔は明らかに見えている。竜宮の玉座で姫君と並ぶ浦嶋子も顔が描かれ、故郷へ戻って、辺りの人にここにあつたはずの我家のことを尋ねるうろたえた顔も、竜宮にいる間に時が経って皆死んでしまったと嘆く浦嶋子の悲しそうな顔も明らかに描かれ、ついに玉手箱を開けてしまいたちまち老人になった惨めな姿も、顔は隠さずに描かれている。

ところが浦嶋が神とされて仮社殿に像が祀られ人から拝まれる場面では、像の下半分は描かれても、顔は屋根に隠されて見えない。さらに最後の場面は大きくなった浦嶋神社の祭礼の様子であるが、絵の左側に立派な社殿は描かれるものの、浦嶋の姿もその像も見えない。「浦嶋神社縁起絵巻」の場合、神として祀られる以前に浦嶋子が登場した10箇所では、いずれも顔が見えるように描かれていたが、神として祀られた後の2箇所では、いずれも顔が見えない。(図8)

以上のように、「春日権現験記絵」の神々も「浦嶋明神縁起絵巻」の浦嶋子も、神として祀られる以前の顔は描かれても、神として祀られた以後は顔が見えないように配慮されている。このような使い分けは、恐らくは神の顔を描かないという禁忌を守る

(図8)「浦嶋明神縁起絵巻」の人から神として祀られる前後



祀られる前(顔が見える) 祀られた後(顔が見えない)

なかで、のちに祭神となる主人公の感情の揺れや表情を少しでも見せる目的で工夫されたのであろう。

祀られる前の神は顔を表すが、人に祀られた後は神の顔を見せない、という描き分けはこの2作品に限らない。類例の神社縁起絵巻として、「箱根権現縁起絵巻」や「八幡縁起絵巻」などが挙げられよう。また「松崎天神縁起絵巻」をはじめ多くの天神縁起絵巻においても、生前の菅原道真から怨霊となって出て来た場面や雷神となって清涼殿に現れる場面の多くで道真の顔が描かれる一方、神となって祀られた後は、社殿が描かれるのみで決してその姿は表されない。神社の縁起絵巻において、人から祀られた神は顔が見えないように配慮されているのである。

おわりに

かつて姿を持たなかったはずの日本の神々は、中世には僧形神像や本地仏像、垂迹神像と多様な姿に造形されるようになった。しかしそれほど具体的な人の形に表されても、礼拝する人々の目からは隔てられ、見えぬように祀られてきた。

他方では見て拝むための神の造形として、人以外の姿で神を表した神号や神使の動物、神社の風景の宮曼荼羅のような、別手段も開発されている。

そして、人々の目にさらされる神社の縁起絵巻においては、神を人の姿を描きながらも顔だけはさりげなく見せない、さらには神が祀られる前までは顔をあきらかに描いても、人から祀られた以後の場面では神の顔を見せないという細かな描き分けの配慮が行われていた。

日本の「見てはならない神々の表現」としては、神々が人の姿で造形されるようになった中世以降も、神の姿、特にその顔を見せないために、神像の安置方法や、礼拝対象として描く内容、絵巻の中の神の表現のように、多方向からの工夫が行われていたことを、特徴として挙げたい。

【主要参考文献】

- 奈良国立博物館『垂迹美術』角川書店 1964年
 岡直己『神像彫刻の研究』角川書店 1966年
 景山春樹『日本の美術』18「神道美術」至文堂 1967年
 景山春樹『神道美術』雄山閣 1973年
 佐々木剛三・奥村秀雄編『日本美術全集』11「春日・日吉・熊野」学習研究社 1979年
 達日出典『神仏習合』六興出版 1985年
 関口正之『日本の美術』274「垂迹画」至文堂 1989年
 佐々木剛三『神道曼荼羅の図像学』ぺりかん社 1999年

- 奈良国立博物館『特別展 神仏習合』奈良国立博物館 2007年
 山本陽子「春日権現験記絵に見る「神の顔を描くこと」をばかる表現」について『美術史』第140号 1996年
 山本陽子「見えぬように描く—絵巻における日本の神々の描かれ方—」『宗教美術研究』第4号 1997年（いずれも『絵巻における神と天皇の表現—見えぬように描く—』中央公論美術出版 所収）
 山本陽子「神を見ることと描くこと—石清水八幡宮の事例を中心に—」伊藤聡編『中世文学と隣接諸学』3「中世神話と神祇・神道世界」竹林舎 2011年
 山本陽子「聖なるものの誕生—見えぬ神々はどのように表され、隠されたか」岩波講座『日本の思想』8「聖なるものへ」岩波書店 2014年

【図版出典】

- (図3以下は部分写真で、図版上に指示図形を加えている)
 図1 薬師寺所蔵僧形八幡神像（奈良国立博物館『特別展 神仏習合』八幡三神坐像より）
 赤穴八幡宮所蔵八幡神像（ぎょうせい『日本の仏像大百科』5習合神・高僧）八幡三神坐像より）
 百草八幡神社所蔵阿弥陀如来坐像（日野市観光協会 <http://shinsenhino.com/archives/spot/temple/>)
 図2 東京国立博物館所蔵春日宮曼荼羅図（東京国立博物館『MUSEUM』541号 原色図版1）
 図3 東京国立博物館所蔵（前田氏実・永井幾麻模写本）『春日権現験記絵』（中央公論社『続日本絵巻大成春日権現験記絵上』より）
 図4 東京国立博物館所蔵（前田氏実・永井幾麻模写本）『春日権現験記絵』（中央公論社『続日本絵巻大成春日権現験記絵上』より）
 増上寺所蔵『法然上人絵伝』（至文堂『日本の美術』95「法然上人絵伝」より）
 図5 東京国立博物館所蔵（前田氏実・永井幾麻模写本）『春日権現験記絵』（中央公論社『続日本絵巻大成春日権現験記絵上』より）
 石山寺所蔵『石山寺縁起絵巻』（中央公論社『日本絵巻大成18石山寺縁起』より）
 図6 東京国立博物館所蔵（前田氏実・永井幾麻模写本）『春日権現験記絵』（中央公論社『続日本絵巻大成春日権現験記絵上』より）
 図7 東京国立博物館所蔵（前田氏実・永井幾麻模写本）『春日権現験記絵』（中央公論社『続日本絵巻大成春日権現験記絵上』より）
 図8 浦嶋明神所蔵『浦嶋明神縁起絵巻』（中央公論社『日本絵巻大成22浦嶋明神縁起』より）